

## 『想像の共同体』 試論

ナショナリズムにおける言語の役割に着目して

牲川波都季

**概要:** 本稿では、『想像の共同体』(B. アンダーソン)を、言語とナショナリズムの関係という観点から概括し、その知見と限界とを論じた。『想像の共同体』は、1) 「出版語」が媒体として生み出す共同体意識、2) 言語のもつ原初性・同時存在的共同性、という2つの観点から、言語がいかに国民国家の出現と形成に関与してきたかを明らかにした。ただし、国家語を規範化し国民や属領の人々に強制する過程や、その強制を可能にしたイデオロギーが十分に論じられていない点は、限界として指摘できる。筆者はこの原因を、アンダーソンが反植民地ナショナリズムに共感を抱き、言語を国民国家という共同体への新たな参加手段として位置づけている点に見いだした。抑圧と解放の二面性を持つナショナリズムという示唆は非常に重要だが、本書には言語ナショナリズムの問題化という点では限界があり、後続の研究が個別の事例に沿って補っていく必要がある。

**キーワード:** 想像の共同体, ベネディクト・アンダーソン, ナショナリズム, 言語と国家

## はじめに

ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(Anderson, 1991 白石他訳 1997)<sup>注1</sup>は、ナショナリズムの起源と形成過程を歴史的に描き出し、ナショナリティ(国民を構成するということ)とナショナリズムがともに「文化的人造物」(pp. 21-22)<sup>注2</sup>であることを明らかにした。この、ナショナリズムの発生と形成に重要な役割を果たしたものの一つと位置づけられているのが、言語である。『想像の共同体』は、ナショナリズムを語る際の「古典」(若林, 2002, p. 250)であるのと同様、ナショナリズムを言語との関係から語ろうとする者にとっても、すでに「古典」の位置を占めている。具体的な記述の内容については本論で触れたいが、『想像の共同体』は、90年代半ば以降相次いで刊行されるようになった、「日本」と「日本語」との関わりを問題にする研究でもたびたび引用されている<sup>注3</sup>。

こうした一連の研究にとっての「古典」である『想像の共同体』について、言語とナショナリズムの関係に焦点を絞り概観し、限界を指摘することが本稿の目的である。具体的には、まず、共同体意識・国民意識形成における言語の役割を、『想像の共同体』に即してまとめる。次に、言語の役割についての記述から、アンダーソンのナショナリズム観・言語観について論じる。最後に、そのナショナリズム観・言語観に関連して、ナショナリズム形成・維持に関する言語のネガティブな側面が論じられていないことを『想像の共同体』の限界として指摘したい。

## 1 ナショナリズムの起源と流行における言語の役割

『想像の共同体』には二つの問いがある。一つは、ナショナリティとナショナリズムという文化的人造物がいかにして歴史的存在となったのか、その意味がどのように変化してきたのかという、歴史的な経緯への問いである。二つ目は、なぜこの文化的人造物が、そのために人を死に至らしめるほどの、情念を揺さぶり愛着を引き起こす正統性をもつのかという、ナショナリズムへの愛に対する問いである (pp. 21-22, 232)。

### 1.1. 問い 1: ナショナリズムを生み出し流布してきた言語

一つ目の問いについて、アンダーソンは、特にヨーロッパにおけるナショナリズムの勃興・形成について、言語が非常に重要な役割を果たしてきたとし、次のように論じた<sup>註4</sup>。

14世紀から16世紀頃、絶対君主は実用的な目的から「行政俗語」を採用し、その行政俗語は、結果として権力の言語へと上昇し、ラテン語＝キリスト教世界という旧来の共同体の衰退をもたらした (pp. 80-82)。その後、17世紀には、資本主義、印刷・出版というコミュニケーション技術、人間の言語的多様性の宿命性、これら3要素の相互作用により、多様な俗語が「出版語」として統合された。その「出版語」は、それを読み書きする人々の間に共同体意識を生みだし、これが国民意識を胚胎しうる基礎となった (pp. 82-85)。そして、18世紀後半の比較言語学・辞書編纂革命が、各言語の境界を明確に定め、言語間の対等を保証することで、「出版語」は「国民的出版語」になった。すなわち、辞書編纂革命によって、知識人・中産階級、少し遅れて大衆は、「国民的出版語」の話者・読者であるという意識＝国民意識をはっきりと抱くようになり、民衆的国民運動が起こった (第V章)。一方、王朝は、民衆的国民運動に応戦し自らの権力を保持すべく、特定の俗語を「俗語国家語」に採用し、民衆の間に広がって

いた国民的帰属という意識に歩み寄った (pp. 146, 148)。さらに王朝は、19世紀半ばの時点で、「俗語国家語」の使用を強制するようになり、民衆ナショナリズムは「公定ナショナリズム」へと変質した (pp. 146-149)。

アンダーソンによれば、言語は、民衆に共同体意識・国民意識を生じさせただけでなく、そうした民衆的国民意識に基づく国民運動に応戦しようとした支配者にとっても重要な役割を果たしたということが出来る。統一化された言語は、それを話し読む人々が共同体・国家内に存在するという意識を生み出し生み出させる媒体として機能してきたのである (pp. 210-211)。

## 1.2. 問い2: 原初性・同時存在的共同性をもつ言語

しかし、このような言語を媒体にした、ナショナリズムの出現と形成過程それ自体は、二つ目の問い—なぜこの文化的人造物が、そのために人を死に至らしめるほどの愛着を引き起こす正統性をもつのか—に答えてはくれない (pp. 232)。ある共同体に属するものとしての意識を共有していたからといって、必ずしも人はその共同体のために死ぬるわけではないからである (pp. 237)。二つ目の問いに対しては、国民という文化的人造物が自然性・宿命性を持った純粋なものに思えるからだと答えられており (pp. 236-237)、さらに、こうした純粋性と深い関わりを持つのが言語だと位置づけられている。言語は、起源を特定できないため原初性を持ち、したがって、現代社会に深く根付いたものに思われ、同じ言語使用者であった死者との感情的な結びつきをもたらす。また、たとえば祭日の国歌斉唱のように、言語は特殊な同時存在的共同性を示すことができ、想像の共同体を体現させそれを純粋なものと感じさせるのである (pp. 238-239)。

つまり、歴史的過程において、言語は、出版語という媒体として、それを話し読む人が同時に存在するという意識、すなわち共同体意識・国民意識をもたらしたのだが、それだけでなく、言語それ自体の、原初性・同

時存在的共同性という性質のために、国民というものへの純粹な愛着をももたらしたのだと述べられている。こうしたアンダーソンの議論は、数多くの事例に基づいており説得力を持って、言語が、ナショナリズムの勃興と形成にいかにか重要な役割を果たしてきたかを明らかにしている<sup>注5</sup>。

## 2 『想像の共同体』の言語観と本書の限界

### 2.1. 偶然性・媒介性の強調、言語的多様性という宿命

ただし、こうしたヨーロッパの記述において強調されているのは、「行政俗語」「出版語」にはナショナリズムは全く関係しておらず、また「行政俗語」「出版語」「俗語国家語」が採用され流布したのは、偶然で無自覚なものだったという点である。絶対君主が、ある「行政俗語」を採用したのは、あくまでも官吏の便宜のためであり、その時点では、深いイデオロギー的な衝動、プロト・ナショナルな衝動はなく、言語をさまざまな臣民に強制しようとする思想も存在しなかったという (pp. 80-82)。「出版語」の出現は、言語の宿命・技術・資本主義との間の、なかば偶然の相互作用によるものであり、それがもたらした口語間の地位分化もあくまでも結果的に起こったことだった (pp. 82-84)。さらに、「俗語国家語」は、少なくとも王朝がそれを採用した初期には、誰の計画にもよらず強大な権力と地位を手に入れていき、結果的に、それを従来使用していた臣民に優位を保証し、使用していなかった人々を脅かすことになったとされる (p. 133)。言語は明らかにヨーロッパのナショナリズムの出現に関与したけれども、少なくとも公定ナショナリズムとそれによる国家語の強制ということが起こる以前においては、言語がいかにかに選択・統一化され、それがいかにかに共同体意識・ナショナリズム形成に関与したかは、偶然で無自覚かつ結果的な過程であったとされている。

また、言語の共同体意識・ナショナリズムの形成への関与について、もう一点強調されていることは、言語の媒体性である。ナショナリスト・イデオログは、言語を国民というものの表象として扱うが、言語のより重要な役割は、それが出版語となり媒体となって、想像の共同体を生み出し、特定の連帯を構築する能力にあるとする (p. 211)。そして、同様の機能を果たせる別の媒体があるなら、言語に代わって、国民国家というモジュールを流布し共同体を想像させることができるともいう (p. 212)。つまり、アンダーソンは、言語がナショナリズム形成に果たした役割は、それを読み書き使う人間が、その言語で書かれたものを読んだり使ったりすることで、遠く離れた者との共同性を想像し得たという、媒体性にあると強調しているのである。

言語の採用・統一の過程を偶然で無自覚で結果的なものとし、また、共同体意識・ナショナリズムの出現・流布に媒体として作用したと描く背景には、ナショナリスト・イデオログへの批判があると考えられる。アンダーソンは、資本主義・コミュニケーション技術・人間の言語的多様性という宿命性の相互作用によって想像の共同体意識が出現したとし、言語の宿命性について次のように書いている。

手の施しようのない言語的多様性という一般的条件の意味において、宿命性の観念を心にとめておくことはきわめて重要であるが、この宿命性を、特定の言語の原初的な宿命性 [日本人にしか日本語はわからない]、そして、そうした言語と特定の領土単位とのつながり [日本語は大和のことばである] を強調するあのナショナリスト・イデオロギーに共通の要素と同じものだと考えてはならない。重要なことは、宿命性、技術、資本主義の間の相互作用である。(p. 83)

『想像の共同体』では、一言語と一国民・一国家との境界が必ずしも折り重なるものではないことが、南北アメリカやスイスなどの例から繰り返し述べられている (p.87, 第IV章, pp.212-217)。一国家・一国民に固有の一言語という、言語と国民国家との関係の本質的なものとみなすようなナショナリスト・イデオロギーを、アンダーソンは明瞭に批判しているといえるだろう。それゆえに、ある言語がある国家・国民にとっての宿命であり本質であるというような記述—たとえば、ある特定言語はその優秀性ゆえに、ある国家・国民の国家語にならねばならなかった、それだけの能力を特定言語はもっていたというような記述—はせず、偶然に無自覚に選択されたこと、テレビなどの視覚メディア同様の、媒体の一つとして機能してきたことを、歴史的経緯として淡々と記述していると考えられる<sup>注6</sup>。

## 2.2. 人為性・強制、排他性という問題

こうしたアンダーソンの言語観は、『想像の共同体』に限界ももたらしている。一点目は、言語が共同体意識・国民意識を形成していく過程で、多様な言語の使用者に対し一言語の使用を強制し、多様な言語を排除した可能性については十分に論じられていない点である。

公定ナショナリズムがやがて「俗語国家語」を国民に強制したことは、タイ、ロシア、ハンガリーの例から指摘されてはいる (pp.85-86, 149, 167)。が、それに至る以前の、「行政俗語」「出版語」「国民的出版語」の出現と流布、「俗語国家語」の採用が、結果的にではあれ他の俗語を周縁化したことについてはあまり触れられておらず、むしろ結果的であったことが強調されている。

また、公定ナショナリズムの出現以降の、「俗語国家語」の採用・流布を記述した箇所でも、その規範化や強制力に全く触れていない場合もある。たとえば、日本の明治期のナショナリズムについては、それ以前にすでに列島全域にわたり同じ表記システムが使用されていたので、「学校と出版

による大衆の読み書き能力の向上は容易で、論議の対象となることもなく、そうした表記システムの統一性が明治維新後の国民共同体の構築を助けたとしている (pp. 158-159)。明治以降の、標準語の規範化・制度化の過程や、学校教育での方言の排除といった問題には全く触れていない<sup>注7</sup>。

二点目は、帝国主義国家がそれへの包摂を目指して、被支配者に強制的に言語を教育し、被支配者の言語を排除したという問題がほとんど取り上げられていない点である。

アンダーソンがいうように、言語が国民意識の出現と形成に大きな役割を果たしたのだとすれば、帝国主義国家にとって、言語は属領化した人々に国民意識を生じさせる上で、最も重要で有効な手段となりえると考えられる。しかし、大英帝国やヨーロッパの公定ナショナリズムを受容した日本のような帝国主義国家に関しては、属領の人々に精神的雑婚を図ったとはされているものの、そうした強制的な帝国主義国家への組み込みにおける言語の役割はそれほど大きく取り上げられてはいない (pp. 154-155)。大英帝国が被支配住民に対して企てた精神的雑婚において、言語という要素は、宗教・文化・政治・経済など他の要素とともに、帝国と紐帯を起こさせる教育内容の一部と位置づけられている (pp. 154-155)。日本について記述された箇所でも、言語が、被支配住民を無理矢理に帝国主義国家の一員に包摂するための教化手段として用いられたのではないかという点は、ほとんど論じられていない (pp. 157-162)<sup>注8</sup>。

先に指摘したように、アンダーソンは、言語と国民・国家との間に本質主義的関係を見いだすナショナリストを批判する。そのため、言語の統一化の過程をきわめて偶然性が高いものと捉え、共同体意識を作る過程における媒体としての役割を強調している。だが偶然性の強調ゆえに、国家語となった俗語が規範化され、国民や属領の人々に強制されるという、人為的な過程についてはあまり論じていない。またあまりに媒介性を強調することは、言語と国民との間に本質主義的関係を見いだし、国民であるため



には言語を学ばねばならないと、国民や属領の人々に国家語の習得を強制したナショナリストの存在を見えにくくしてしまう。

### 3 ナショナリズムと言語

以上、『想像の共同体』における、言語と共同体意識・ナショナリズムとの関係についての記述、その記述を成り立たせる言語観をおさえ、限界を指摘した。最後に、こうした限界の根底にあるものとして、アンダーソンがナショナリズムをどのようなものと捉えているのかを見ておきたい。

アンダーソンは、言語によって形成されてきた国民や国家というもの、それ自体を批判しているわけではない。体制による公定ナショナリズムについては、それが民衆の言語ナショナリズムを抑圧するマキャベリ主義的なものであるとして明瞭に批判する。しかし、ナショナリティやナショナリズムの存在それ自体を否定はしない。

フィリピンの独立運動家でもある文学者、ホセ・リサールの詩を引用する前に、アンダーソンは次のように記している。

ナショナリズムのほとんど病理的ともいえる性格、すなわち、ナショナリズムが他者への恐怖と憎悪に根ざしており、人種主義とあい通ずるものである、と主張するのが進歩的、コスモポリタンの知識人のあいだで（それともこれはヨーロッパ知識人に限ってのことなのだろうか）、かくも一般的となっている今日のような時代にあっては、我々はまず、国民は愛を、それもしばしば心からの自己犠牲的な愛をよび起こすということを思い起こしておく必要がある。(p. 232)

民衆による反植民地ナショナリズムは愛とともにある。そして、その反植民地ナショナリズムは人種主義を否定し超える可能性さえもつという (pp. 249-250)。言語は、こうした愛を呼び起こす国民という共同体への、新たな参加を可能にする希望として位置づけられている。

言語は排斥の手段ではない。原則として、誰でも、どの言語でも学ぶことができる。それどころか、言語は本質的に包摂的であり、誰もすべての言語を学ぶほど長生きすることはできないという、あのバベルの宿命だけによって制約されている。(p. 211)

かりに国民的なるものがそのまわりに宿命の靈気を帯びているにしても、それは歴史に埋め込まれた宿命である。この意味で、ケチュア語を話すインディオを「ペルー人」と洗礼し命名したサン・マルティンの布告—改宗と親和性をもつ運動—は模範的な例と言える。というのは、これは、国民が最初から血ではなく言語によってはらまれたこと、そして人はこの想像の共同体に「招き入れ」られうることを示しているからである。(p. 239)

民衆ナショナリズム、反植民地ナショナリズムへの共感ゆえに、言語は他の言語や人々を排斥する手段であるというよりも、基本的には、ナショナリズムの参加のための可能性として描き出されている。そのため、民衆ナショナリズムの形成にあたって、結果的にであれ俗語間に地位分化がもたらされたこと、公定ナショナリズムにおいて、国家語が民衆に強制されたこと、帝国主義国家が被支配者を包摂するために強制的に国家語を教育し、被支配者自身の俗語を排除したことなど、言語の強制と他の言語の排除という問題は強調されないのである。

しかしそうした限界を残しつつも、公定ナショナリズムにおいて、支配者は強制的にナショナリズムを押しつけようとするが、一方で民衆の反

植民地ナショナリズムが排斥ではなく愛をもたらすものであるとするアンダーソンの議論は、ナショナリズムの二面性に十分配慮すべきであることを教えてくれる。

徐(1994)は、アンダーソンは、ナショナリズムを民衆のナショナリズムと公定ナショナリズムとが混合するアンビヴァレンスだと書いている、と述べている(徐, 1994, p. 90)。そして、多数の本が、『想像の共同体』の一部だけをナショナリズムとか国民というものは想像の共同体にすぎないという言いまわしで引用しており、概念操作によって、ナショナリズムを恣意的に選択したりやめたりできるというような誤読がなされていると指摘する(徐, 1994, pp. 81-82)。民衆的ナショナリズムを立ち上げそれに参入せずにはいられない人々の存在、公定ナショナリズムを押しつける一員として他者を排除してきた人々の責任、さらにまた両方のナショナリズムが混在している場合もあること。ナショナリズムの二面性を見ずにひとしなみにナショナリズムとは人為的なものにすぎないと捉えることは、そうした歴史性を忘却するものであると、徐は述べているのであろう。

若林がいうように、『想像の共同体』は「理論的な概念と構想を略画的に描く仕事」であったため「一種の「スケッチ集」」であり、「この書物には書かれていないこと、必ずしも具体的に実証され、分析されていないこともきわめて多く」(若林, 2002, pp. 258-259)、先に指摘したような問題構成の偏りなどの限界は、当然生じるものである。重要なことは、『想像の共同体』は、国民や国家なるものは歴史的に構築されたものであり、その構築に言語が大きな役割を果たしたという構図を示したことである。後続の研究には、各国民国家の文脈に沿って、ナショナリズムと言語との関わりを具体的に跡付けていく作業が求められていると言えるだろう。

## 注

- 1 『想像の共同体』の初版が刊行されたのは1983年であり、その後、1991年に増補版が出版された。本稿では、1997年刊行の、増補版日本語訳 (Anderson, 1991 白石他訳 1997) を用いる。
- 2 以下、著者名・著作年を記さない括弧内のナンバーは全て、Anderson (1991 白石他訳 1997) 中の頁数を表す。
- 3 酒井 (1996, p. 168), イ (1996, p. ii), 長 (1998, pp. 9, 50, 62 など)。ただしこれらの研究は『想像の共同体』の主張を全面的に踏襲しているわけではなく、その批判的発展を目指したものである (注7参照)。
- 4 『想像の共同体』を概括した白石 (1999) も、「アメリカの革命においてスペイン語、英語が争点とならなかったのに対し、ヨーロッパでは「国民的出版語」がイデオロギー的、政治的にきわめて重要な意味をもち、ナショナリズムはなによりもまず民衆の言語ナショナリズムとして現れた」と述べている。また、南北アメリカにおける言語の位置づけについては、本稿の注4参照。
- 5 ただし、出版語と国民意識・国民国家の間に常に連続性があるわけではないことも述べられている (p. 87 および第IV章)。南北アメリカは、スペインやイギリスなどの本国と出自・言語を共通にしていたため、ナショナリズム勃興期には言語は争点にならず、役人の「巡礼の旅」と印刷業者による新聞の刊行が国民意識の形成を決定的にしたという (第IV章)。また、ナショナリズムの型がモデルとして確立し、言語以外のコミュニケーション技術も発達しつつあった19世紀末には、言語の共同性なしでも国民が想像されうるようになったともされている (pp. 211-217)。
- 6 井口 (2004) も、俗語ナショナリズムの偶然性の強調から、アンダーソンが本質主義的なナショナリズムを徹底して退けようとしていると指摘している (井口, 2004, pp. 56-59)。井口 (2004) は、『想像の共同体』を、従来の国民に関する議論全体の中に位置づけ直そうとするものであり、アンダーソンの国民を描き出す方法論的立場の固有性を、非常に明瞭に論じている。

- 7 これらについては、イ (1996, pp. ii-iii), 長 (1998, pp. 9-10) も指摘している。
- 8 日本帝国主義は、帝国の膨張により日本は属領の人々を日本化しようとしたが、属領の人々は「日本語を完全に読んだり話したりしたかもしれないが、本州のどこかの県を管轄したりすることは決してなく、それどころか、出身地の外に赴任することすらなかった」と記述されている (p. 162)。たとえ日本語を使用できるという意味での日本化を達成しても、決して日本人同様の法的地位を得られたわけではなかったことを示しているが、ここでも、日本語を完全に使用するに至るほどの教化の問題には触れていない。

## 文献

- イ・ヨンスク (1996). 『「国語」という思想』 岩波書店.
- 井口由布 (2004). B・アンダーソン「想像の共同体」再考 『史資料ハブ地域研究』 3, 51-66.
- 長志珠絵 (1998). 『近代日本と国語ナショナリズム』 吉川弘文館.
- 酒井直樹 (1996). 死産される日本語・日本人——日本語という統一体の制作をめぐる (反) 歴史的考察 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史——地政的配置』 新曜社 pp. 166-210.
- 白石 隆 (1999). ベネディクト・アンダーソン 『大航海』 28, 86-91.
- 徐 京植 (1994) 『「民族」を読む——20世紀のアボリア』 日本エディタースクール 出版部.
- 若林幹夫 (2002). ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』 大澤真幸 (編) 『ナショナリズム論の名著50』 平凡社 pp. 250-260.
- Anderson, B. (1991). *Imagined Communities: Reflections on the origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London: Verso. (アンダーソン, B., 白石さや・白石隆 (訳) (1997). 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 NTT 出版)